

エコたま



グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第127号(通巻第187号)
2014年6月19日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

生ごみリサイクル交流集会 in 多摩 2014



標記の集会在6月14日午後、エコプラザ多摩で開かれた。(写真)事例発表は東京近郊の5自治体(団体)だったが、聴講者はなんと大阪から遠路駆けつ

てくれた人を含む90人以上。机の前に座りきれなくて、壁沿いに椅子を置いて座る人も出るほどだった。主催はNPOごみ・環境ビジョン21と多摩地域で活動する市民で構成する「生ごみリサイクル交流集会実行委員会」。

最初は江戸川区で生ごみ堆肥づくりの講習会を開催。10年間で1000人の受講者を育てた。町会、学校、サークルなどへの出前授業も行っているという「江戸川区生ごみ堆肥化実践クラブ」の中村美里子さん(写真)。

●楽しい生ごみ堆肥づくり 江戸川区で10年継続!



同クラブは2003年9月に26名が参加して設立。それ以前の00年に江戸川区廃棄物減量等推進審議会が設置され、生ごみ減量部会から生ごみ半減の提案がなされた。区では01年に「生ごみリサイクル実践モニター」を30名募集したが、応募は78名あった。

02年9月から実践モニター修了者を対象に「リサイクルリーダー講習会」が1年間開かれ、その修了式後に今後の活動のグループづくりに向けた話し合いが行われ区清掃課からの要請・誘導もあり、同クラブの設立にいたった。04年から05年の修了者も会員として迎える。

クラブ設立後1年間は準備期間として、組織作り、勉強会、スライドやテキスト作成にあてた。そして2005年より江戸川区内3000世帯(1%)の生ごみ自家処理を目指して、講習会開催の活動を活発化させていく。

そして出前講座は、隣の葛飾区の要請で3回コースの講習会を実施したほか、区内各地の大学、小学校、町内会などで実施している。また、緑のフェスティバル、環境フェア、区民祭りなどに参加してミニ講習を行うとともに、正規講習会への参加も呼びかけている。ミニ講習会を受けた人には生ごみ堆肥で育てた苗300鉢を贈呈。

生ごみ堆肥化による経済効果の試算。家庭から出る可燃ごみの半分が生ごみ。生ごみの90%は水分だから、焼

却処分は水を燃やすようなもので、大量のエネルギーが必要。処分費用は約5万8千円/トン。1世帯の生ごみ排出量は1日550g、年間約200kg。

江戸川区の年間ごみ処理経費は約100億円。生ごみを堆肥化すると(人口68万人、約30万世帯)、1世帯1年間で約11.4千円の処理費削減に。講習会参加者1000人が堆肥化を続けると年間約1140万円の経費節減に。そして仮に区内の全世帯が生ごみを堆肥化すると年間約34億円の経費節減になる。さらに堆肥化が進むことで産業や雇用も生まれ、経済効果も期待できる。また、収集運搬と焼却にかかるCO₂の排出が削減される。

●活かそう食材 活かそう生ごみ

鎌倉のごみ減量をすすめる会 高田晶子さん(写真)

鎌倉市はごみ問題で、いま喫緊の課題を抱えている。それは2つあるごみ焼却炉のうち古いほうは平成27年3月末で停止されるのだ。停止焼却炉の年間処理量は1万トン。残りの新しいほうの焼却炉の処理量は年間3万トン。ところが、焼却量は平成23年の4万トン弱から25年には3千トン減の約3万6千トンになっているものの、27年には家庭系、事業系合わせて3万トン以下にしなければならないのだ。



このごみ減量を進める会は平成23年、鎌倉市の要綱に基づいて市と市民と事業者が協働し、鎌倉市のごみの発生抑制、ひいてはごみ焼却量の削減を進めることを目的に発足した。具体的には以下の活動を行っている。①ごみの発生抑制及び焼却量削減に関する実践活動、②上記に関する啓発及び周知活動。

対応1)13年9月に住宅自治会に啓発キャラバンを行った。ごみ減量の実践講和とごみ処理ワークショップで、実際の生ごみを使って行った。対応2)家庭での生ごみ処理推進。市は9割の補助金をつけて推進しているが、期待どおりには普及が進まない。購入しても使わない家庭や、使うことをやめる家庭も少なくない。隣の葉山町のモデル地区では地区の全家庭が生ごみ処理機を導入した結果、パッカー車によるごみ収集が軽トラに代わった。

●地域で進める生ごみリサイクルの輪づくり

生ごみ堆肥化めぐみネット・羽村 戸井田久美子さん

羽村市は多摩地域の焼却灰の埋め立て地、二ツ塚・谷戸沢に近く、人ごととしては捉えられないと思っていた。地球環境のためにもごみを燃やしたくない、だから心から行動に移さねばと思った。

そして2011年3月に「めぐみネット」を立ち上げた。堆肥化協会との出会いから瀬戸先生の後押しを受け、講習会を行ったり各地の事業の見学、地元の有機農家との提携などに進んだ。年4回の頼り作成やブログも。

ダンボールコンポスト講座で普及活動を進めている。モニター事業で市と連携し、中学校には出前授業を行い、小学生向けのパンフレットも作製した。消費者展、環境フェスティバル、チューリップ祭りなどにも参加。木箱でコンポストを作成したり、腐葉土育成箱で堆肥化の研究なども行っている。(残り2自治体は次号に掲載) →戸井田久美子さん



原発に頼らぬ社会へシフトは可能か(下)



講演する田中優氏

自然エネは徐々に増やしてあげればいい。その前にやるのが省エネ・節電。このほうが先だ。みなさんの家庭には「四天王」がいる。四天王とは冷蔵庫、照明器具、テレビ、エアコン。五天王にすると暖房便座が入って、電力消費のほぼ半分だ。

1995年を100として、現在はだいたいすべての電気器具の電力消費が半以下になっている。冷蔵庫など97%も減らした。家庭内で最大電気消費する冷蔵庫がそれほど減った。古いものはフロンガスや代替フロンを使っている。そういう古いものを使っていたら、ただちに買い替えなさい。

電気料金が1年間に3万円安くなる。いま新品が9万円で購入できるから3年で元がとれる。その新しい冷蔵庫で従来並みの電気を使おうとしたら、33台並べることになるほど。だから省エネ製品が急進歩したときには、省エネ製品に替えたほうがいい。冷蔵庫以外の品物は、買い替えというチャンスがめぐってきたときに省エネ製品を選ぶことをやってもらえばいい。

それをやっていくとどのくらい電力消費が減るかということだが、わが家は努力・忍耐、一切しないで合理的に減らした。最も省エネになっている製品をどんどん入れて、現在みなさんのお宅ではだいたい1日・10kW。ところがわが家は3kW。努力・忍耐しなくても3分の1に下がる。とにかく節電のこつは電気で熱をつくらないことと、省エネ製品を選ぶこと、これが大事なポイント。

現在の売電制度を広げていったらどうなるのか。じつはドイツではいま大変な問題になっている。ドイツの自然エネの買い取り費用の上乗せ分は、大企業にはしていない。大きな会社はもうけているけど（外国との競争力維持という名目で）払っていない。一般家庭の負担にどんどん乗せている。だから一般家庭は「なんでオレたちだけが負担するんだ！」と怒っている。

日本はこの二の舞いをしようとしている。それを知っていたので、僕は東京から岡山に引っ越した。東京では21坪で5200万円もしたのだが、岡山では160坪で580万円、おまけに古民家つき。そのおかげで太陽光発電を並べて、パーソナルエナジーっていう発電所のセットを買った。合計で500万円だった。前からこういうことをしたいと思っていたのだが、以前は数千万円もしていた。

地面の上に直接置くような形で、古民家で電気を自給していくことにした。システムのなかにはリチウムイオン電池で25年以上持つという優れモノがあり、スマートパーソナルエナジーセンサーも入っていてバッテリーの状態を正確に知ることができる。

朝、晴れていると電気が満タンになるのが昼の12時。これ以上発電しても余ってしまうので、こういう日を「電気富豪の日」と呼んでいる。庭には井戸があったのでそれを復活させて電動ポンプ

をつけた。古民家にもエアコンをつけた。それに電動草刈り機を買ってきたりと、余る電気を使おうとせっせと努力している。だからわが中国電力の電気メーターも外した家は電気代と水道代はタダというわけ。



だけど、雨がずっとバッテリーがどんどん減ってきちゃって「電気貧乏の日」がやってくる。貧乏の日は困って3万5千円の発電機を買ってきた。でも、いくら田舎とはいえ、エンジンがトントンと回るわけだから近所迷惑になる。これじゃまずいなど、もう一組、太陽光のセットを買うことにした。

今度のはめっちゃ安。太陽光パネルが8枚・2kW、それと充電器とインバーター、バッテリーは再生品だが12個。これ全部で108万円。安い能力は低い。どうして安いかというと、バッテリー。普通のクルマで使っているものの再生品だからだ。これを新品のような能力にする技術が日本で開発された。ただし、自分でキットを組み上げなければならないが、支援チームがあり、みんなで手伝いに来てくれる。だからわが家は中国電力とも契約していたが、いまは解除してメーターも取り外した。

だれですか、原発がなくなったら江戸時代の生活に戻りたいのか、原始時代の生活になるんだぞ、なんて言ったのは。だから、たかが電気ごときに命をかけるなんて、まったく馬鹿げている。たかが電気なりの対応で十分。将来、家は省エネ住宅にして、電気は太陽光でつくり、余ったらパーソナルエナジーにためてそこで使う。それでも余ったら電気自動車に充電して使う。ガソリン代が不要になる。カネのいらぬ生活が実現できるんです。

(5月31日の恵泉女学園スプリングフェスティバルにて収録)

「生ごみ入れません！袋」動機づけ当たる

多摩市が独自にごみ減量政策として取り入れている「生ごみ入れません！袋」の市内各所での今年度前期分の配布がこのほど終了した。5月19日にエコプラザ多摩（午前）とベルブ永山・講座室（午後）で始まった登録と配付は、市内8カ所まで6月12日まで行われたが、ひとまず終了。今後はエコプラザのみで30日まで引き継がれる。

この緑色、透明の袋は、市民が自分で生ごみを処理し、市の収集には出さないことへのインセンティブ（ご褒美、動機づけ）として導入された。樹脂製の器具やダンボール、さらに電動などの器具で生ごみを堆肥などに換え、野菜や花の生育などに使うことで、市が収集する生ごみを減少させるのが目的。器具購入には半額の補助も出る。

該当する市民は各自の自家処理法などを書き、「袋に生ごみを一切入れません」との宣誓書に署名すれば、前期、後期と2回に分かれ、各10L入りの無料袋を20枚ずつ配布される。市民にとっては、有料袋を買ってごみ出しすることに抵抗を感じているから、これに飛びつく人も。この制度ができてから、生ごみを自家処理するようになったという人は実際に少なくなく、市の思惑は奏功しているようだ。

一登録と配布を受ける人

